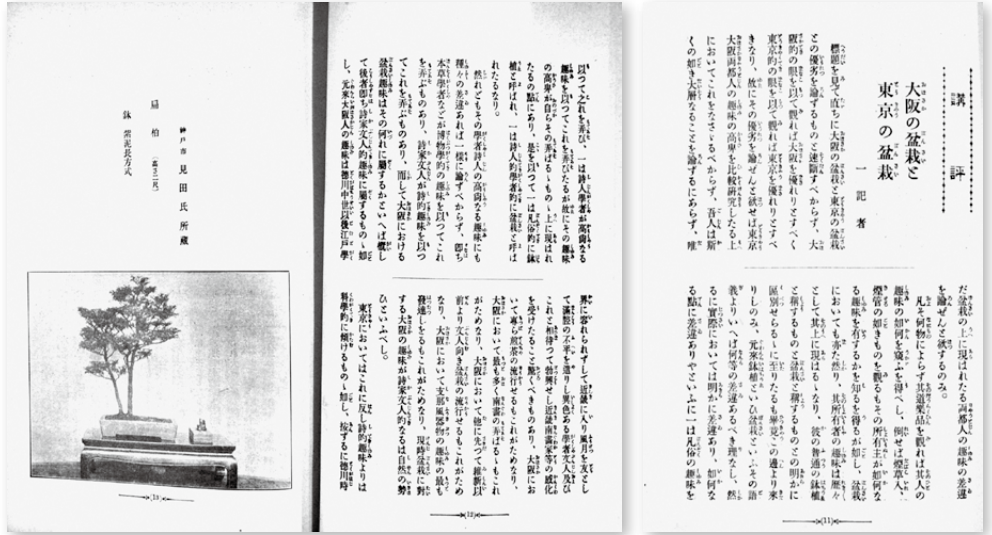


【收藏品紹介】 明治時代の東西の盆栽文化

今号では、盆栽雑誌『盆栽雅報』（盆栽同好会（東京）の機関紙。明治39年（1906）5月創刊）と『華』（大阪園芸会の機関紙。明治40年11月創刊）から、明治期の盆栽文化を描き出し、今日の盆栽文化が生まれる過程を探っていきます。



『盆栽雅報』29号（明治41年9月）



『華』2年3輯（明治41年3月）

（略）煎茶を喫して閑談を楽しむに在り、一は床飾り等は前に異ならざるも、盆栽水石等数点を、賑かに配置するに在り、前者は畢竟煎茶好みに因し、高尚雅趣を主とするものなり、後者は盆栽水石を、愛玩するを旨とするものなり」とあり、後者である東京は多くの盆栽を飾り、盆栽自体を愛玩していたようです。また、明治41年3月『華』『大阪の盆栽と東京の盆栽』では、盆栽には、「本草学者などが博物学的の趣味を以つてこれを弄ぶものあり、詩家文人が詩的趣味を以つてこれを弄ぶものあり、而して大阪における盆栽趣味はその何れに属するかといへば概して後者即ち詩家文人の趣味に属するものゝ如し（中略）東京においてはこれに反し詩的趣味よりは科学的に傾けるものゝ如し」と述べ、東京は本草学など博物学的・科学的な目線の盆栽趣味であったと言います。『華』は、大阪と東京の違いが生まれた理由について、大阪は江戸の学界と交わらず、世の中に批判的

な学者や文人が南画家の感化を受けたためであり、東京は経世学を重んじる江戸時代の風潮と明治維新以降の西洋科学の流入があったためと述べています。大阪と東京の地理的・歴史的背景によって、それぞれの盆栽文化が育まれていたことがわかります。なお、この記事では大阪と東京の盆栽文化に優劣をつけていませんが、後に盆栽の飾り方について議論が起きました。

明治41年9月『盆栽雅報』『暇茗閑話』では、諸道具を揃えて一つ一つにこだわった陳列を批判し、「盆栽の陳列に就ては随分八釜しきことを云ふ人あり、其主たる盆栽は勿論の事、之に用ふる鉢の方円大小色彩台卓の高低形状、掛物、香炉、花瓶、扱ては文房具の種類に就て迄も、彼れ是理屈を述べ、唯だ松柏不老、百事如意、玉堂富貴等の文人画の画題に則るに過ぎざるなり」と述べています。更には、最近では盆栽の趣味家以外の人々にも盆栽趣味の広がりを見せ、益々その盛況を願う上で、「文人的陳列の如きは、寧ろ妨害こそなれ、決して斯界の隆盛を増進すべきものに非ず（略）適宜に陳排して賞観すれば足る、要は盆栽本位に在

り、書画骨董は唯だ陪従添加の品と見れば可なり」と、文人的飾りを廃して「盆栽本位」の飾りをすることを主張しています。

これに対して、明治41年12月『華』『引動清風録』では、「盆栽に陳列を八ケましくいふのは可けない、盆栽は何処までも盆栽本位で無ければならぬ陳列に百事如意だが、不老長春だとか陳腐の語意を暗示して気取てるのは片腹痛い」という「近來一派の盆栽家」すなわち『盆栽雅報』の主張を愚論とし、「吾輩は断言する、陳列の趣味を解しない人は盆栽の趣味を解しない人だ」と反論しています。

列か、あるいは盆栽同好会の趣旨に沿った陳列をして多くの人の観賞に供するかが論じられました。

ちなみに、この議論が起る前に、盆栽同好会の中でも議論があったことが、明治41年8月『盆栽雅報』『史稗盆栽』からわかります。それによると、盆栽会の開催に当たり、発起人同士で意見が衝突し、一人は「由来盆栽は雅趣を楽むものなれば、其陳列配合は最も高雅にするを要す、（略）煎茶を喫して以て閑話を為すを好し」と主張し、もう一人は、「其説の如きは余りに高雅に過ぎて、盆栽陳列会の趣旨に適せず、今盆栽会を開いて世人に観覧せしむるは、個人清閑の楽みを為すにあらず、衆と共に楽むの趣意なれば、閑趣を尊ぶべき場合にあらず、賑やかに陳列し、観覧する品種を多からしむるを本意とす」と主張しました。煎茶風の陳

このように、盆栽の陳列をめぐる大阪の煎茶的飾りか、東京の賑やかな飾りか、という揺れ動きがありました。結果、東京の陳列方法が広がり、仕立て方も東京流が全国に広まります。明治43年2月『華』の「盆栽道第十一回（五）盆栽の歴史（下の五）」によると、東京の盆栽は「従来の文人風南画風の趣味の他に写生風の趣味を投入したのである（略）随つて盆栽の木振り枝振りから盆の好みから培養法からを一変した、そしてそれが大阪へも京都へも、名古屋へも高松へも他の地方へも大なる影響を与えて殆ど天下の盆栽を一変した」といいます。